金魚の形をした島

宮本常一は、日本中を歩きまわった民俗学者である。数多くの村を訪れ、古文書を読んだり、また古老の話を採取して記録した。著書『忘れられた日本人』『家郷の訓』のなかで宮本は、自分の祖父や家族のこと、また故郷の風景や人々の生活を、愛惜をこめて描写している。美しい風景、素朴な人情や習慣、親子の心情的つながり、総じてかつては日本のどこにでも存在したが、高度成長の過程で日本人が次第に失っていったものが、淡々と綴られている。

宮本は、山口県大島郡東和町の出身である。日本地図をひろげると、愛媛県と山口県の間に、金魚の形をした島が浮かんでいるのを見ることができる。これが周防大島、元来は屋代島といった。前に紹介した怒和島は母方の故郷であったが、周防大島の東端に位置する東和町伊保田は、他でもない私の父の出身地である。だから私はよく冗談めかして、「父方、母方、どちらからいっても先祖は瀬戸内海の海賊に違いない」と、言っている。

東和町には、高齢化率日本一の町というもうひとつ別の顔がある。にもかかわらず、寝たきりのお年寄りは少なく、現在の生活に対する満足度もきわめて高いという。この秘密に迫ってみようと、一九九八年春のゼミ旅行では東和町を訪れ、多くの人に会ってお話をうかがった。なかでも沖家室泊清寺住職の新山玄雄さんの、「私たちはおばあちゃんたちをかわいそうだと言っているが、彼らのほうが温かく豊かな世界を持っている。これを忘れると高齢化対策や社会福祉は生きてこない気がします」との言葉は心に残っている。

この島からは、多くの海外移民を出している。私の祖母も、若い頃南米のペルーに行った人だ。つれあいが若死したため、祖母は早く帰国した。その祖母から、ハワイやアメリカ西海岸に永住した親戚は多いとしょっちゅう聞かされてきた。私は授業で学生に、「父母や祖父母の話を聞いて、その歴史をたずねてごらん」と課題を与えている。しかしかくいう私自身、祖母も父もすでに他界し、その係累をたどることが困難になっているのは、なんとも皮肉なことだ。